

## 次世代のがんプロフェッショナル養成プラン 取組の概要と推進委員会からの主なコメント

代 表 校 名 ( 連携大学 名 )	岡山大学 (愛媛大学、香川大学、高知大学、高知県立大学、島根大学、徳島大学、鳥取大学、広島大学、松山大学、山口大学) 計 11 大学
事 業 名	地域をつなぐ未来世代のがん専門医療人養成
事 業 責 任 者	岡山大学学術研究院医歯薬学域教授 藤原俊義
事 業 の 概 要	<p>本事業では、中国・四国地方9県全域にわたる11大学が連携し、「誰一人取り残さないがん対策」を推進できる人材育成を目指す。過疎地での放射線治療や病理診断を担う専門医を養成するとともに、オンライン診療技術なども取り入れて連携体制を構築する。本拠点で推進してきたチーム医療による患者本位の全人的医療教育を発展させる。高齢者がん・緩和・在宅医療教育体制を再編し、老年腫瘍学・腫瘍循環器学の教育科目を充実させ、新たな関連分野にも対応できる医療人を育てる。がんゲノム医療にユニバーサルスクリーニングを導入し、がん予防医療を推進できる医師やメディカルスタッフを養成する。本拠点が得意としてきた遺伝子治療の創薬研究や免疫療法の開発を発展させ、医薬品や医療機器開発を推進する人材を輩出する。チーム医療やがん看護リカレント教育、医学物理士養成など、本拠点の強みをさらに発展させ、中国・四国のがん医療の均てん化に努める。</p>
推進委員会からの主なコメント	○：優れた点等、●：改善を要する点等
	<p>○中国・四国地方9県全域にわたる11大学が連携し、地域の課題に取り組む構想は評価される。</p> <p>○放射線治療や病理、ゲノム医療、がん予防などの専門職を育成し、本地域で均てん化を明確に目的としていることは評価に値する。創薬可能な専門職の育成も視野に入れた記載となっている。</p> <p>○地域の特性からオンライン診療技術を導入し、チーム医療や「誰一人取り残さないがん対策」という目標は評価できる。</p> <p>○がん予防においてもハイリスクストラテジーとして遺伝性腫瘍に対するサーベイランスや遺伝カウンセリングを行い、ポピュレーションストラテジーとしてがん予防栄養学を取り入れるなど、その成果が期待される。</p> <p>○「老年腫瘍学」を得意とする島根大学を加え、教育体制の強化が期待できる。</p> <p>○テーマ②において、他のプロジェクトでは見られない、「がん予防栄養学」が設定されることは評価される。</p> <p>○アウトプットにおいては具体的な数値が記載されており、さらに各年度ごとに分かれて記載されているため、計画性が高いと評価できる。さらに大学ごとの設定とコースがまとまって記載されており、役割分担が明確で事業の運営体制がしっかりしていることが読み取れる。</p> <p>○目標受入人数が、実績を根拠として算出されていることは評価できる。現実的な人数を記載されていると予想されるので、本事業により確実な専門職の育成が期待される。</p> <p>○連携大学が横断的に14のワーキンググループ(WG)を構築し、幹事校が統括・他大学を指導し、当該事業の計画を遂行するとされており、横断的な活動が期待できる。</p> <p>○がん予防に関する啓発活動は十分ではなく、小中高生や市民等への「がん教育」等の教育というツールに期待していることを十分に理解して計画を立てている点は評価できる。</p> <p>○教育コースの企画運営、チーム医療合同演習会、市民講座など、具体的な内容が毎年あり、コンスタントな活動が期待できる。</p> <p>○市民講座の開催や医師会との連携などの計画も均てん化に関して期待ができる。</p>

- 成果の普及について、拠点病院の地域のみならず、全国的にも普及させるなど広く成果の普及が期待される。
- 指導者の相互乗り入れなど有用な事業の継続が期待される。
- テーマごとの「課題と対応策」と「テーマに関する強み」の関係性が乏しく、本プログラムの実践によって課題が解決するのか疑問が残る。
- 難治性のがん疼痛に対する構想が明らかにされていないことや、現状で患者や家族が感じている困難に関して臨床面からの教育に具体的記載が少し乏しい傾向がある。
- 小児や AYA 世代に対しては、ゲノム医療が対応していると考えられるが、社会的サポートや緩和医療分野に関する構想も望まれる。
- がん予防と緩和医療の人材育成について、医療ビッグデータに基づいて評価したリスクをどのようにがん予防実践（生活指導、検査、処方）に結びつけるかを医師免許を持つ学生に指導する育成モデル開発を期待する。
- がん治療やケアの専門職の教育が本事業の目的であり、それに沿った内容となっているが、緩和医療も含めた患者側や社会の視点からの評価目標があれば、より理想的である。
- 教育コースは各大学のカリキュラムによるものが多く、他職種の業務に関する見学や実施研修などがあれば、より望ましい。
- がん予防に係る専門資格との連携においては、認定遺伝カウンセラー、遺伝性腫瘍専門医など限られている。一方で、大学で連携したインテンシブコースが設定されておらず、各大学の人材育成が他県に波及していかないことが懸念される。
- 痛みの緩和や生活の質を保つためのリハビリテーションに携わる人材の育成をもう少し実施していただくと、さらに望ましい。
- アウトカムで提示されている、1) 専門資格の取得者数、2) リカレントプログラムへの参加者数、3) がん診療拠点病院への就職者数、4) 放射線治療医の不足解消に関して、具体的な目標数値が掲げられておらず、教育効果を測れない。
- アウトカムにおいてがん予防における評価指標が家族性腫瘍カウンセラーなどに限定されている。学会などとの連携を介して医師における指標設定も望まれる。
- 連携大学横断的な 14 のワーキンググループ(WG)の内容は図に記載があるが、具体的に WG がどのような活動を施行するか具体的な立案があれば、さらに望ましい。
- コースごとの目標人数に関する根拠の記載がないものが散見される。
- 中国・四国地区における成果の普及に関して、もう少し具体的で詳細に記載されることが望ましい。未来世代の人材養成として、どのような次世代コンテンツの育成モデルを全国に普及させていくのかも明らかにすることが望ましい。
- 補助期間終了後において、各大学との連携が不明瞭である。
- 年度別計画は、最終年度に「最終成果報告書」が加わっただけの記載になっており、5年間同じ計画の中で、事業の妥当性を問うような計画の記載が見当たらないので、より具体的な計画が明記されとより良い。